

---

# **君だけをサポート！**

密月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君だけをサポート！

### 【NZコード】

N36280

### 【作者名】

密月

### 【あらすじ】

「大切な人をサポートしないか？」夢の中の男にそう声をかけられた。飼い主を大事に想つあまりに成仏しきれなかつた動物たちが、人間の姿になり飼い主を守る会社。『夢幻の空』。想いを背負い、彼らからみた世界はどのような世界なのか…

## プロローグ（前書き）

動物が飼い主のためにどたばた走り回る小説が書いてみたかったのでやってみました。  
擬人化・死にネタがあるので、あまりお好きでない方はご遠慮ください。

文章の作り方など未熟な点が多くございますが、よろしくお願いします。

## プロローグ

ボクはいつだって君を見てきた。

思い出したらきりがないけど色々なことしてもらつたね。  
そうそう、あのときのこと覚えてるかな？

ボクが体調を崩して倒れたとき君はつきつきりで看病してくれたね。  
うれしかつたよ。

純粋にうれしかつた、君と一緒にいれてすゞへうれしかつた。  
でも、なんで？

ねえ、なんで泣いてるの？

そんな悲しい顔でこっちを見ないでおくれよ・・・。  
ボクまで寂しくなっちゃうじやないか。

君は笑つてる顔が一番なのに・・・。  
なんだか、眠くなつてきちゃつたな。  
でも、寝たらいけない氣がする。  
もう君と会えなくなるようで。

「...ゆつくり、寝ていいよ。また、また...」おおつまつまつ

そんな君の声が聞こえた気がした。  
大粒の涙をボクに落として。

ゆつくりと、ボクは深い眠りについた・・・。

そして物語のページはめくられた

## 第一話・お誘い

「あれ、こー、どーだろ?」

ボクは気がついたらじんまりとした何もない真っ白な部屋の中にいた。

さつきまでボクの「主人……」すことう はやで 水稻 鳥くんと一緒にいたのに。ちょっと寝てる間にボクをこんなところに置き去りにしたのかな? そんなことないよね…… 鳥くんに限つて。

ボクは嫌な気分を振り払うかのように首をふった。

「それにも、何もない部屋だなあ。……はやく帰らないと。」「君は帰る」とはできませんよ。」

見上げると全身黒ずくめで長身の男がほほ笑みかけていた。さつきまでこの部屋には誰もいなかつたはずなのに。急に怖くなつてきて、思わずしりもちをついてしまつた。

「だ、誰……?」

「おやおや、そんなに怖がる必要はありませんよ。ね、タロウくん?」

そういうと男は優しくボクを抱きあげた。

よく見ると優しい目をしてくる。真っ黒だから心まで真っ黒な悪いやつなのかと思った。

人は見かけじゃないなあ、と改めて思つてしまつ。

ボクがそんなことを思つていると男はボクを見つめてこう言つてきました。

「……名前:タロウ。犬種:パピヨン。性別:オス。年齢:2歳2ヶ月。性格:忠誠心が強く、人懐っこい。元気がよいが心臓病持ちだった。……血が濃すぎたんですね。タロウくんは。」  
びっくりだ。

なんで全部わかるんだろう?

「あ、あんた……一体……?」

ボクは驚きを隠しきれないまま男にそう問い合わせた。男はボクの質問には何も答えず逆に問い合わせてきた。

「飼い主をサポートしませんか？」

「は？」

「君は死にました。でも颯くんへの想いが強くて成仏しきれないでいる。颯くんを守るために私と手を結びませんか。」

何言つてるんだろう、こいつは。

頭大丈夫か？ 颯くんが言つてた、あれか。『中2病患者』つてやつか。

やれやれ、今の時代「あにめ」だか「まんが」だか知らないけど、そういう影響受けるやつが沢山いるつて言つてたな。

それに、ボク死んでないし。

「・・・ボクは、死んでない。嘘も大概にしろよ。」

「いえ、君は死にました。つい先刻、ね。」

「嘘だ！ だつて、ボクつ・・・」

大粒の涙がぽろぽろと零れ落ちた。

犬だつて、泣けるんだよ。

男はボクが泣いたのを見て少し表情を変えたが、優しく微笑んだ。

「・・・信じられないでしようが、これは事実です。申し遅れました。私、『夢幻の空』のオーナーをやっております。スカイ、と申します。空、とでもお呼びくださいませ。」

「夢幻の空？」

「はい。簡単に説明しますと、君のように死んでしまった動物で飼い主を強く想う心を持つ者たちを集めて仕事をする会社でございます。飼い主のサポートをして恩返しをしたり、なんでも屋のようないボランティアなどをいたします。」

空はボクの頭を優しくなでながら言つた。

触れてくる手が大きくて、でも暖かくてきもちよかつた。

「・・・でも、ボクは犬だよ。人間みたいに働けないよ。」

「その点はご心配なさらず。君には人間の姿を与えます。当社はま

だ経営を始めたばかりでして。社員があまりいないのです。ご協力、  
願えますか。

ボクは少し考えてしまった。

空は決して悪い人ではないだろう。でも、そんな、こんな話あるのだろうか？

そもそも本

そもそも本當は死んでしまったのだからが

考えてみればわからないことだらけだけど、ボクの周りに颯くんがないのが、唯一の証拠だろう。

ホケは窓にしゃがひしぐ  
笑てみせた

卷之三

「……。」  
「……。」

タロウくん。

「え？ いくつて・・・扉ないよ？」

空はにじり、と笑つてどこからか杖をとりだした。

何か嫌な予感がした。

ପାଠ୍ୟକର୍ତ୍ତା

持つていた杖は勢いよく床を突き破り、底の見えない穴に空はボクを抱き込まぬ飛び入り。

「はは、大丈夫ですよ。・・・あれ？タロウくん

ホケの意識は「」で、たん途絶えてしまつた。

## 第一話・お誘い（後書き）

ここからタロウたちの物語が書きつけられています。  
まあ、どう動いてくれるのでしょうか。

## 第一話：入社

「う、ん・・・？」

「おや、気がつきましたか。」

あれ、ボクなんでソファーなんかで寝てんだ?  
それに、ソファーってこんなに小さかったっけ・・・?

「空、ここは?」

「(口)が我々の会社ですよ。それより、鏡、見ます? 気が付いて  
いないようなので」

そういうと手鏡を渡してきた。

・・・鏡の使い方とかわかんないって・・・。

颯くんは、確かに・・・手にもつて・・・手?

「・・・あれ?」

犬の手じゃない。すらりとした指が5本ある。  
この手の形って、颯くんたちと同じじゃ・・・。

「ちょ!! 鏡よこせ!!」

ボクは慌てて空の手から鏡をむしり取った。

「あんまり乱暴に扱うと壊れてしま・・・」

「いいから!! ・・・あ・・・・

そこにうつっていたのは、黄土色の髪で黒い目をした青年がうつって  
いた。

これがボク? 人間じゃないか。

颯くんと同じような動作で鏡を動かしてみる。

鏡の中には目を輝かせた青年がボクを見ているだけである。

「・・・タロウくん? あの?」

「・・・」

ボクは空と鏡の中の青年を交互に見た。

そして、自分の目で自分の体を見てみた。

たち耳系な犬耳パークーにジーンズ、手には指のとこだけきられて

いる手袋。

「タロウくん？」

「そつ空ああああ！－なつ、何これ！なんでボク人間？！」これ、ボク？！」

「うおあ、お、落ちついで！」

「せつ、説明きほんぬうううう…！」

「えつ、えつとですね！君が氣を失つてる間に人間化させたんですよ！」

人間化とかそう簡単にできるのかよ・・・。

というより、本当にこの人なんなんだ。

ただの人間がこんなマネできないよね。

「おい、お取り込みんとこ悪いんだけど、オーナー？おれのこと、呼んだまま放置？」

声が聞こえたほうを見ると、黒髪短髪のめんどくさいそうな顔をした青年が扉のそこに立っていた。

「あ、ラスクくん。」

「ラスクって呼ぶな、今の名前はリョウだよ。で？オーナー？何？仕事？」

「あ、それもありますけど・・・」

「・・・何？この茶色い毛玉。きたねー色してんな」

なつ！ボクの毛色汚いとかつ・・・！初対面で失礼なやつだな！  
しかも、こいつ見下してくるし！－なんだよーこいつ！－

「きつ、汚いってなんだよ！－」

「は、そのまんまだぜ？お前、田え見えてんのか？」

「なんだとおおおー！」

「まつ、まあまあ一人とも落ちついてください！」

空が慌ててボクらの中に割つて入つてきた。

うるさいな、空には関係ないのに！

何？！お人よしなのかよつ！ふつー！

「なんでオーナーがとめんの？」

「いや、あのですね。一人にはペアになつてもいいのかと。」

「「はあ？！こんなめんどくさそうなやつと…。」」

思わずはもつてしまい、お互に嫌そうな目で見る。

・・・よく見たら、リョウのやつなんか悲しい目、してゐる気がする  
ような・・・。

そんなことを思つてたらリョウが口を開いた。

「・・・ちつ。めんべくさいけど、面倒見てやるよ」

舌打ち？！今、こいつ舌打ちしたよねっ！

むきー！むかつぐ！こういうタイプ、嫌い！

「ま、まあまあ・・・とにかく、一人とも仲良くなれださいね？  
で、たゞそくですが依頼がきてます」

「えつ、もう仕事あ？」

「何いつてやがる、このぼけ。お前、おれの足ひっぱつたら承知し  
ねーぞ。」

「なあにおおづ！」

「ふふ・・・依頼の内容につりますね。今回の依頼は、颯くんの  
お友達の佐倉 明くんからですね。『大切なペットが逃げてしまい  
ました。小さな鳥です。おれがうつかり窓をあけっぱなしにしてい  
て、逃げてしまいました。どうか、探してくれませんか。お願ひし  
ます。』・・・だそうです。」

「今日は鳥探しか・・・かつたりーな。」

「明くん、そんな人じやなかつたはずなのに・・・」

「はあ？どういうことだよ。」

「いや、昔は動物大事にしてつづかり、つてこともなかつたんだ。  
おかしいなあ。」

ボクが首をひねつてそういうと、一人の表情が変わった。

あれ？なんかまずいこと言つたかな？

「・・・ラスクくん、気をつけて、依頼に行つてくださいね。」

「ああ、わかつてゐ。つか、ラスクっていうんじやねえ。」

「？？？？」

「おひーこーからせつせつと準備しやがれ！できしだい行ぐやー…」  
セツコウと、リョウは勢いよく扉を閉めて出ていった。

リョウが出てこつてから、ボクは空と一緒に準備をする」と云った。

何を持つて行くのか悩んでいると、姉は「こいつとはほ笑んだ。

「タロウくんは、別に何も持つていかなくていいですよ。」

「はあ？」

「多分、ラスクくんがほとんど荷物用意してくれると思こますよー。それに、武器なんて君は拳で十分ですね。」

やつぱりこつ、頭おかしいんだ。

仕事いくのに手ぶらって・・・ふつうないだろ。

とこつか、武器とか・・・物騒なこというな。

「あ、うん。わかった・・・じゃあ飴玉でももつていいくかなあ。

「私のお手製飴でも持つていきますか？」

「うん。ありがとう。じゃあ、行つてきまーすー。」

なんだろ、なんか嫌な予感がするなあ・・・。

そして、ボクは足早にリョウとの待ち合せの場所へと走つて行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3628o/>

---

君だけをサポート！

2010年10月17日17時22分発行